2016年3月15日

出雲大社 宮司　千家 尊祐様

DOCOMOMO Japan 代表
松隈　洋

出雲大社庁の舎　再生活用に関する要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
本会は、20世紀の建築と環境遺産の価値を認め、その保存を提唱することを目的の一つとする、国際的な非政府組織 DOCOMOMO（Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement＝モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織）の日本支部です。

この度、出雲大社「庁の舎」の解体の話があると伺い、「庁の舎」が日本の伝統を表現した世界的にも知られた近現代建築であることから、庁の舎の再生活用を要望する次第です。

出雲大社庁の舎については、1998年に日本建築学会の歴史意匠委員会に設けられたDOCOMOMO対応ワーキング・グループによって、2003年に「日本を代表する近代建築100選」の一つとして選定され、2005年に開催された「文化遺産としてのモダニズム建築―DOCOMOMO100選」展で発表されました。この東京汐留の展覧会場に多くの来場者がありましたが、展覧会はその後大阪等へも巡回され、図録、JA（新建築社の海外建築誌）、ブルータス、ホームページを通して、日本だけでなく海外へも広く発信されました。「庁の舎」は、スカイハウスと並び菊竹清訓の代表作であるばかりか、日本の伝統を表現したデザインとして、国内はもとより世界の建築関係者が注目している価値の高い建築です。漏水等の問題があり、解体に関しては幾度も検討された上での結論と考えておりますが、二度と建設できない価値ある建築であることから、「庁の舎」の再生活用に向けた御検討を今一度、以下の点からお願い致します。

1．出雲大社のかけがえのない神域を考えた「庁の舎」

菊竹清訓に博物館の設計を依頼していた出雲大社奉讃会長の田部長右衛門（島根県知事）が、菊竹の真摯に設計に取り組む姿勢に動かされ、菊竹を出雲大社へ連れて行きこの「庁の舎」の設計がはじまりました。菊竹は初めて見る出雲大社に、大きな衝撃を受け言葉を失いましたが、その姿を見た田部長右衛門は、火災で焼失していた社務所の設計を依頼しました。燃えない建築にしてほしいと頼まれた菊竹は、「荒垣のなかには、木造建築のみが建てられており、様式建築のみが存在する特殊な神域という環境と、要求されたもつべき機能の追求のみからは、つまりわれわれが、これまでもってきた設計の理論では、何の手がかりもつかめなかった」＊1と告白しています。

そこで当初は、透明なガラスの建築に挑み欧米のガラスを調査しましたが60年代の技術では実現できず、神域をコンクリートで汚すことも極力避けたいと考えた菊竹は、工場で製作したプレキャストコンクリートを木造建築の仕口にならい組み合わせて建築することを目指しました。＊2　一方、外観の斜めの壁は、本来必要としたボリュームを小さく感じさせ、木造建築が建ち並ぶ中で、それらの脇役として佇むように「庁の舎」は計画されました。

2．他に例のない日本の伝統を表現したデザイン

菊竹清訓は「庁の舎」の設計に際して、与えられた機能の他に「神域を照らす『あかり』であり、本殿が倉とすれば、庁の舎は『いなかけ』でなければならない」＊1とそのかたちの原点を述べています。大棟梁と斜めの壁がつくり出す姿に、巨大な稲穂掛けのイメージを重ね、日本の田園風景を思い起こさせる形態を創りあげました。日本の伝統を直喩的なデザインで表現するのでなく、知的に昇華させた形態は、世界から注目される卓越したデザインとなっています。

３．当時の最先端の技術でつくられた建築

時代ごとの最高の技術水準で造営されてきたとする出雲大社において、「庁の舎」の営造にあたってもそれを問い挑戦した建築です。まるで鳥居に似せたかのような大棟梁と大柱の主体構造は、技術的な問題から現地で一部のコンクリートを打設せざるを得ませんでしたが、ポストテンションという今でも有効な技術を使い、10mの奥行きに、間口45mという無柱空間を実現し、他の部材は、プレキャストコンクリートで構成されました。当時の技術の革新を伝える貴重な建築であるとともに、慎重に打設されたコンクリートは、補修により今後も使用が十分可能と考えられます。

４．国内外で高く評価され広く周知された秀作

「庁の舎」は、第15回日本建築学会作品賞（1963）、第6回BCS賞（1965）、第14回芸術選奨文部大臣賞、第7回汎太平洋賞（アメリカ建築家協会 1964）等、数々の建築関連各賞を受賞した秀作であり、広く知られています。現在でも国内外の建築設計の関係者が一度は訪れたいと考える建築のひとつです。

５．菊竹清訓の代表作であり日本の近現代建築に欠くことのできない作品

「庁の舎」の設計者の菊竹清訓は、1928年に久留米で生まれ、早稲田大学在学中に広島平和記念聖堂の設計競技で２等の丹下健三に続き、前川國男と同格の３等となり一躍脚光を浴びました。卒業後は竹中工務店、村野森建築設計事務所に勤務の後、1953年に独立した建築家です。2011年に逝去するまでに約600の作品を設計し、多数の話題作を発表しました。また、菊竹は「代謝建築論　か・かた・かたち」等、建築界に大きな影響を与えたデザイン論も発表し、メタボリズムの提唱者の一人として位置づけられています。そして、菊竹清訓建築設計事務所からは、内井昭蔵、仙田満、伊東豊雄、長谷川逸子、富永謙、内藤廣、大江匡等の多数の著名な建築家が育ちました。その菊竹清訓の代表作が「庁の舎」であり、日本の近現代建築を語る際に「庁の舎」は欠くことのできない建築作品と位置づけられます。なお、「庁の舎」の設計は小川惇、遠藤勝勧、内井昭蔵らが担当し、現場は武者英二らが担当しました。

日本の伝統を知的に表現し、日本の近現代建築史上欠くことのできない「庁の舎」は、世界に誇れる貴重な文化遺産なのだと私たちは考えます。以上のことをご理解いただき、本会のこの「庁の舎」の再生活用の要望を、是非ご検討いただけますようお願いする次第です。尚、本会は、この建築の再生と活用に関して、学術的・技術的な協力を可能な限りさせていただく所存です。

「庁の舎」の再生活用に向けた御検討を今一度、お願い致します。

敬具

■註

＊1.「設計仮設　現代建築への設計の理論」菊竹清訓　建築　1963年9月号

＊2.　遠藤勝勧氏ヒアリングによる　2016.2